

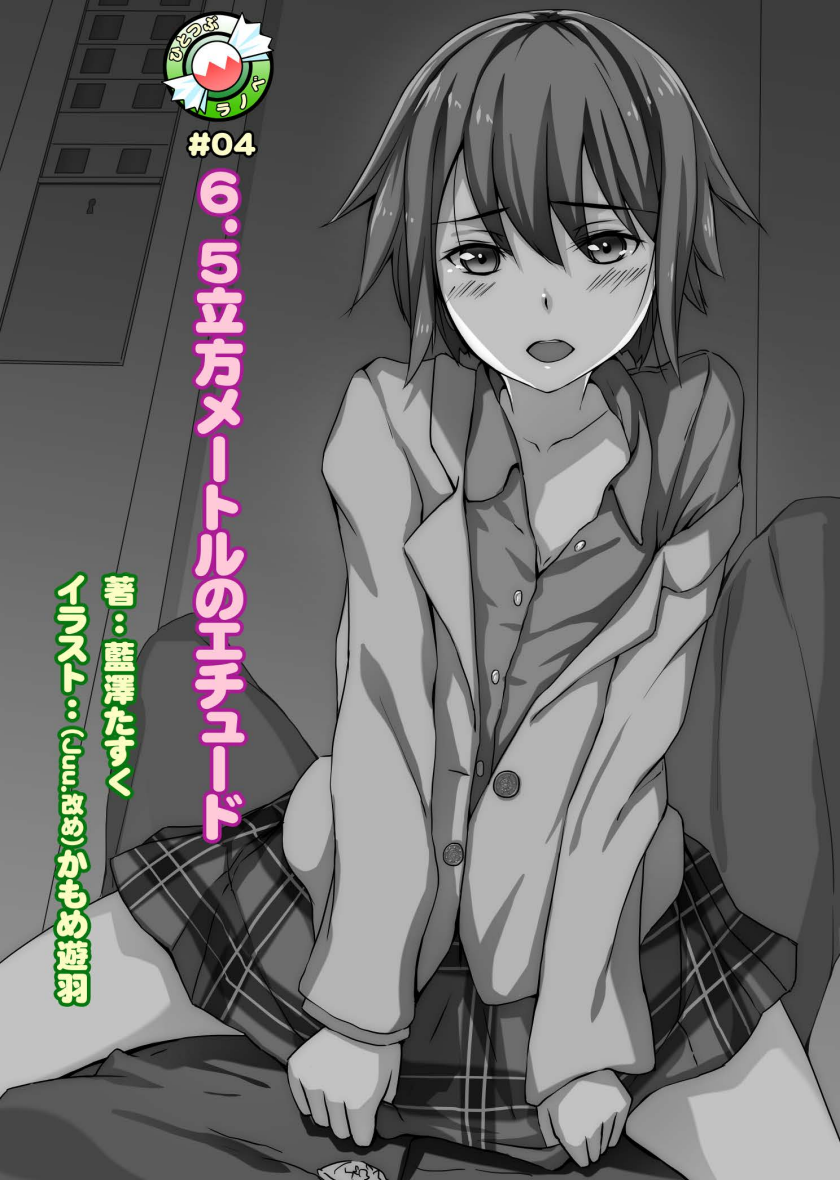


#04

# 6.5立方メートルのエチュード

著：藍澤たすく

イラスト：(C)E改めかもめ遊羽



「暑い」

「暑いすね」

「狭い」

「狭いすね」

沈黙。

静寂。

「あー、もう！ さっきからいらいらすんのよ、そのオウム返し！」

「黙ってたら辛気くさいからなんか喋れって言ったのは栗山先輩じゃないすか！」

「オウム返しは会話じゃないわよ！ なに？ あなたの脳は鳥類以下なの？ 100グラム68円な

の!?!」

「ひっでー。しかも68円って胸肉とかじゃないすか!?!」

ぱっ。

「……なに急にファイティングポーズとってんすか？」

「見るな」

「へ？」

「そんな嫌らしい眼であたしの『胸肉』を見るなっつってんだー！」

「見てないっすよ！ なんすか、急に胸肉って！ 心配しなくても先輩のまったいらな胸に興

味なんかまったくあごっ!?!」

鉄拳がクリーンヒット。

「……先輩、相変わらずいいの持ってますね……根こそぎ意識刈り取られるところでした

よ……」

「くほた。あんたなんか食べるもの持ってる？」

「そのパンチがあれば世界を狙え……へ？」

「もうこのエスカレーターに閉じこめられて1時間以上経つでしよ。非常用連絡電話もつながらないし、長期戦を覚悟しないとイケないかもしれないわよ」

「ぶぶっ。先輩、それを言うならエレベーターでしょ？ どこの世界に動く階段に閉じこめられるバカがいるんすか？」

鉄拳。

鳩尾にクリーンヒット。

悶絶。

「げほごほ……。大丈夫すよ、先輩。食いもんは持つてないすけど、この携帯で助けを呼べばすぐに出られますって。げほごほ」

「まじか!?! 久保田でかした！ やっぱりお前、やればできる男だな！ っていうかあるなら最初から出せよバカ！」

再び鉄拳。

もう誉められてるんだか怒られてるんだかも判らない。

「げほ、ごほっ……調子いいんだからもう……。あれ……？」

「な、なんだ!? まさか圏外とか電池切れとか定番のオチじゃないだろうな!? そんな腐ったオチだったら光の速さで殺すかな! マジ即死だかな!」

「いや、さっきの先輩のナイスパンチで液晶割れます……」

「……ごめん」

さらに1時間経過。

「先輩そろそろいいですか? もうおもしろ話も限界つすよ……」

「バカ言ってるんじゃないわよ! 芸人だったらピンで2時間3時間持たすのは当たり前でしょ!」

「いや、自分、一介の男子高校生なんで……それよりも先輩、なんかさっきより暑くないですか?」

「そうね……確かにさっきより暑くなってる……はっ!?」

「どうしたんですか、先輩」

「久保田、お前、息苦しくないか?」

「そういえば、そうすね……」

「まずいな、空調止まってるぞ、これは……」

「えっ!? じゃ、俺たち窒息死ですか!」

「あわてるな。真空管じゃあるまいし、酸素がなくなることはないわ。ただ……低酸素状態による高山病にかかる可能性はあるかもしれないわね」

ぷううー。

「……」

「……」

鉄拳。

顔面にクリーンヒット。

「あほかああ、お前は! なんでこのタイミングで屁をこける!」

「しょうがないじゃないですか! 出物腫れ物とところかまわずって言うでしょ! 緊張したら

出ちゃったんですよ!」

「ぐあああ、くさいくさいくさい! 何食ったらこんな毒ガス出せるのよ、いったい!」

「え? 今日の昼は確か学食の激辛ラーメンとにんくだけ餃子とレバナラと、あとは……」

「もういい、やめろ! 聞いているだけで気分悪くなる!! あああ、くさいくさいくさい!」

窓！ 窓あける、久保田！」

「無茶言わないでくださいよ、先輩。窓なんて……うん？」

「どうした？」

「先輩、あれ、開くんすかね？」

久保田が指した先にあつたのはエレベーターの天井にあるメンテナンス用の鉄の扉だった。ロックもかかっていないようだし、確かに手が届けば開きそうにも見える。

「よっ！ ほっ！ てい！」

久保田がジャンプして扉に手をかけようとするが、一瞬手が触れるだけでまったく埒があかない。

「あんたバカなの？」

「だって先輩、他に方法が……」

「四つん這いになりなさい」

「えっ!? なんすか急に！ 俺そんな趣味ないんすけど!？」

「人を勝手に安っぽいSMの女王様にするな！ あんたが四つん這いになって、その背中にあたしが乗ればちょうど天井に手が届くでしょって言ってるの！」

「あー、なるほど、先輩頭いいっすね」

「まったくおまえの脳味噌はささみ以下だな！」

「じゃ、先輩どうぞ」

「……」

「先輩？」

「……」

四つん這いになった久保田のそばで、なぜか栗山はもじもじとして動こうとしない。心なしか顔も紅らんで見える。

「……るなよ」

「はい？」

「絶対上見るなよ！」

「上？ なんでですか？」

「パンツが見えるからに決まってるだろーが！ そういうことを女の子に言わせるからおまえは草食系最弱の非モテ男だって言ってるんだー！」

「なーんだ、そんなことですか。大丈夫ですよ、そのまったいらな胸同様、先輩のパンツにも1ミリの興味ありませんからへばあ!？」

栗山の強烈なかかと落としによって、久保田はつぶれたカエルのような姿になってその一生を終えた。

いや、終えてはいけません。ちゃんと生きてます。

ちなみに意識が途切れる寸前、かかと落としの予備動作で振りあげられたスカートの中に、はつちり純白のパンツが見えたのだが、それを言うと本格的に殺されそうなので久保田は黙っていることにした。

「うーん……うーん……」

「やっぱりだめっすか?」

栗山は細腕に力をこめて開けようとするが鉄の扉はぴくりとも動かない。

「替わりましょうか?」

「バカ! お前があたしの上に乗ったら潰れるに決まってるんだろ! つていうか上見んな!」  
無実の罪で後頭部を蹴られながらも、久保田はぶつぶつ言いつつ忠実に台座を務め続ける。

「うーん……うーん……あつ」

「!? どうしたんすか、先輩!?」

「動くな……」

「はい?」

「今、動いたら、まずい……」

「え? え? いったい何が起こってるんすか、先輩!? ちょっと上見ていいすか!?」

栗山からの返事が途絶えた。

緊迫した沈黙が空間を支配する。

「今動いたら……おしっこ漏れそう……」

「ええー!? 勘弁してくださいよ、先輩! とりあえず降りて! 降りてください!」

「しょうがないでしょ! 一生懸命力入れてたら、もよおしてきちゃったんだもん!!」

「だからとりあえず降りてください!!」

「バ、バカ! 揺らすな! 揺らしたら……お前……!!」

「とりあえず漏らすにしても降りてからにしてくださいって!」

「だ、誰がお漏らしなんか……きゃっ!」

バランスを崩した栗山が、久保田に覆いかぶさるように落下してきた。

どどど。

そしてまた静寂。

「くぼっ……! お前どこ触ってんだー!」

「すすすいません! わざとじゃないんです! つていうか、早く降りてくださいよ、先輩!」

栗山落下の衝撃で回転した久保田は仰向けになり、その上に馬乗りの格好で栗山が乗ってしまっている。  
そして……久保田の両手は斜めになった栗山の上半身を支えるかのように、がっちりとその

「胸肉」をワシづかみにしていた。

ふにふにふにふに。

見た目よりも10倍は柔らかい感触（※当社比）。

どうやら栗山は着痩せするタイプだったようだ。

「バカバカバカバカー！」

「うわー、先輩やめてください！ やめてくださいって！」

栗山は馬乗りになったまま、久保田をほかほかと殴り続ける。しかしこれまでとは違って、まったく腰の入っていない軽いパンチだった。

「祝ってやるー！ 違う、呪ってやるー！ 初めては初めての人って決めてたのにー!! 決めてたのにー！！」

「先輩、何言ってるかちよつと意味わかんないっす！ とりあえず降りて……！ あ……」

久保田と栗山が同時に硬直する。

栗山の真つ赤な顔がさらに紅潮していくスピードと、久保田の腹の上じんわりとぬるい感触が広がっていくスピードは、ほぼ同じだった。

栗山の瞳に大粒の涙が充填されていく。

「あの……なんていうか……俺、このことは誰にも言いませんから、だからその……」

その刹那。

「おーい！ 大丈夫か!? 助けに来たぞ！ 今開けるからなー！」

外から大きなどら声が響き、エレベーターの扉がみしりという音とともに開き始めた。どうやらエレベーターは次の階に着く直前で停止していたようだ。

「「え!? あつ、あの、ちよつと、待つ……今は、まず……！」」

その後、学園では久保田誠は貧乳スキーという定説がまことしやかに流布され、栗山美優には「彷徨える聖水の魔女」という二つ名がついたということだ。

なぜそんなことになったかは全くの謎である。